栞集を読む

松岡　隆子

ポインセチア父の帰りを待つてゐる　平沢千恵子

ポインセチアはクリスマスの花として最近頓に人々に愛好されるようになってきた。12月になると街のいたるところにポインセチアが見かけられ、クリスマスムードを高めている。

クリスマスイブのテーブルにはナイフとフォークが並べられ、白い皿とグラスが置かれ、そして出窓にはポインセチアが置かれ、みんなで父の帰りを待っている。クリスマスケーキの箱を抱えて帰ってくる父を待っている。

ポインセチアからイメージした回想のワンシーン。いま平沢さんは確かに季語のポインセチアを掌中にした。

外すときもう一度見る古暦　椎名佐和子

いよいよ明日から令和2年。古いカレンダーを外しながら、今年はいろいろあったなあと、感慨に耽る。平成から令和へ、新天皇の即位に伴い新しい御世が始まった。プライベートではご夫君が職務を退かれ今後は現在の居住地に定住されることになったという。〈もう一度見る〉は、カレンダーに刻まれた月日への思いである。真情が共感を呼ぶ。

つなぐ手もにぎる手も失せ時雨けり　梶浦　道成

「無し」ではなく〈失せ〉と言う。「無し」は一時的な現象で完全に無くなったわけではないが、〈失せ〉は完全に消え失せて、もう二度と現れることはないということである。大切な人を失くした寂寥感がひしひしと感じられる。毎月の作品を見る限りでは近親の方が亡くなられたようでもないので、多分回想の一句だろう。〈失せ〉の一語が胸に迫る佳品である。

独り居の日差し集めてなほ寒し　山田香代子

冬本番の寒さは一入身に沁みる。窓に差す日差しは弱々しく頼りない。日当たりのよい窓辺に居てもこの寒さ。〈独り居〉故の寒さもあろう。広い部屋にぽつんと独りでいることが寒いのである。〈日差し集めてなほ寒し〉に作者の心の寒さが思われて切ない。

小春日の誘はれて乗る遊覧船　小鷹　茂代

小春空、小春風、小春凪、遊覧船の揺れに身を委ね、見渡すかぎりの小春を満喫している。遊覧船に乗って良かったと、誘われたことを仕合せに思っている。こなれた表現が季語の〈小春日〉を引き立てている。

神棚に年末賞与供へし日　芝　京子

年末賞与とはなんと懐かしい言葉だろう。ボーナスという言葉が取って代わるようになって、日常生活から消えてし